

【論文】

ウェストミンスター寺院と軍人のモニュメント、1700–1850年

中村 武司

はじめに

1. ウェストミンスター寺院の埋葬者とその特徴
2. ウェストミンスター寺院のモニュメントと「軍事化」
3. 軍人のモニュメントとイギリス帝国の拡大
4. ウェストミンスター寺院からセント・ポール大聖堂へ

はじめに

長い18世紀のウェストミンスター寺院 (Westminster Abbey)¹における著名人の記念や追悼にかんして、2つの史料の引用を検討することから話をはじめよう。まずとりあげるのは、ヴォルテールが1733年に発表した英語版『哲学書簡』のなかの次の記述である。

サー・アイザック・ニュートンは生前から尊敬されており、その死後も受けるにふさわしい敬意が払われていた。国民のなかでも最も高名な人びとが彼の棺をもつ名誉に浴そうと競いあったのである。ウェストミンスター寺院に行ってみたまえ。人びとが称賛するのは、歴代のイングランド王の霊廟ではなく、かの国の栄光に貢献した著名人たちの記憶を永遠に残すべく国民が感謝の気持ちから建立した数々のモニュメントにたいしてなのだ²。

じつのところ、史料の問題もあって、ヴォルテールがニュートンの葬儀をほんとうに目撃したのか判然としないところがある。ただし、『ロンドン・ガゼット』誌の記事から、記述の前半部分を裏づけることができる。それによると、ニュートンの葬儀には大法官のキング男爵、モンローズ公やロクスバラ公のような貴族たちと、ロイヤル・ソサエティの会員が参列し、ニュートンの親戚で

¹ イングランド王ヘンリ3世が再建したウェストミンスター寺院の奉獻750周年を記念して、次の文献が2019年に刊行された。David Cannadine (ed.), *Westminster Abbey: a church in history* (New Haven and London, 2019).

² Voltaire, *Letters concerning the English nation* (Dublin, 1733), pp. 191-2. フランス語版の日本語訳として、ヴォルテール (中川信・高橋安光訳)『哲学書簡・哲学辞典』(中央公論新社、2005年)がある。

あるサー・マイケル・ニュートンが喪主を務めたという³。しかし問題は、後半部分である。イギリスの国家的著名人の記憶を後世に残すために、当時の「国民 (the Nation)」が「感謝の気持ち」からモニュメントを建立したというヴォルテールの記述をそのまま受け取ってもよいのだろうか。

ヴォルテールの『哲学書簡』は、フランスのアンシャン・レジームを痛烈に批判した著作なので、ウェストミンスター寺院をめぐる先の記述も、彼一流の誇張とみなしてもよいのかもしれない。そうだとすると、啓蒙思想それ自体が偉人顕彰の契機を内包していたことをふまえると、それがもつ意味は決して小さくない。ウェストミンスター寺院こそが、フランス革命期に創られたパリのパンテオンの模範になったからである (ヴォルテール自身も、のちにパンテオンに埋葬された)⁴。

いまひとつ、みておきたいのは、18世紀中葉にイギリスを訪れたスイス人画家ジャン・アンドレ・ルケの著作『イングランドにおける芸術の現状』(1755年)である。この著作は、イングランドの絵画や彫刻、建築、演劇、音楽など、芸術や工芸品の状況を幅広く論じたものだが、ウェストミンスター寺院は、彫刻を扱った章でふれられている。興味深いのは、以下の記述である ([] は筆者によるもの。以下同様)。

しかしウェストミンスター寺院を飾る数々のモニュメントは、『哲学書簡』が大げさに述べたような、著名人の記憶を称えるべく国民が建立したものではなかった。その追憶のためにモニュメントが建立された多くの人びとと同様に、世に知られた [アン・] オールドフィールド夫人がそこに埋葬されたのも、友人たちが費用を負担したからである。あの教会への埋葬は個人の利害の問題にすぎず、国民の関心事などではなかった⁵。

一瞥してわかるように、ルケの記述は『哲学書簡』の内容と真っ向から対立する。しかし、ここで引用した2つの史料は、18世紀のウェストミンスター寺院の性格をめぐる大きな問題を示唆しているがゆえに注目に値する。すなわち、ウェストミンスター寺院における著名人の記念とは「公的」もしくは「国民的」なものだったのか、それとも「私的」なものにすぎなかったのかという問題である。本稿で考察を試みようとしているのも、まさしくこの問題である。

³ *London Gazette*, no. 6569, 1-4 April 1727, p. 7.

⁴ フランスのパンテオンについては、モナ・オズーフ (長井伸仁訳) 「パンテオン——死者たちのエコール・ノルマル」、ピエール・ノラ (谷川稔監訳) 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史、第2巻 統合』(岩波書店、2003年)、105-37頁；長井伸仁『歴史がつくった偉人たち——近代フランスとパンテオン』(山川出版社、2007年)をみよ。

⁵ Jean André Rouquet, *The present state of the arts in England* (London, 1755), pp. 64-5. フランスの文筆家ピエール・ジャン・グロレも、ウェストミンスター寺院におけるナショナル・モニュメントの不足を指摘している。Pierre Jean Grosley, *A tour to London; or, new observations on England and its inhabitants*, 2 vols (London, 1772), i, pp. 204-5.

20世紀末以降、歴史的記憶やコメモレイション（記念＝顕彰行為）への関心の高まりを背景にして、モニュメントに代表される「文化的記憶」のメディアをめぐる研究が大きく進展した⁶。ウェストミンスター寺院もまた例外ではなく、ウルフ将軍のような著名人のモニュメントや詩人コーナーなどを対象とした研究が進められてきた⁷。その内容をひとつひとつ詳述するのは避けるとしても、本稿の問題関心から言及しておかなければならないのは、マシュー・クラスクによる論考である。彼の言葉を借りれば、ウェストミンスター寺院とは、個人の利害関心から創られた公共のパンテオンということになる⁸。筆者も、大枠ではこの見解に異論があるわけではない。もっとも、クラスクの論考は、1720年から70年にかけての半世紀間を対象としたものにすぎず、長い18世紀全体を網羅的に扱った研究はなお必要とされていよう。本稿の大きな目的のひとつは、ウェストミンスター寺院のモニュメントについて、今後の研究の基礎となりうるデータや統計を提示することにある。それにあたり、考察の対象をハノーヴァ朝の時代（1714－1837年）を含む1700年から1850年にかけての150年間に設定する。また、筆者のこれまでの問題関心から、軍人のモニュメントに注目して考察を進めることとしたい。

ここで史料について少し説明しておこう。基本的な史料として、19世紀末から20世紀前半にかけて刊行された王立委員会の報告書があげられる。ひとつは、1890年から翌91年にかけて、ウェストミンスター寺院におけるモニュメント建立のためのスペース不足という問題をめぐって設置された王立委員会の2つの報告書で、オンライン版の議会資料（House of Commons Parliamentary

⁶ 文化的記憶にかんしては、アライダ・アスマンの一連の業績を参照されたい。アライダ・アスマン（安川晴基訳）『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』（水声社、2007年）；同（磯崎康太郎訳）『記憶のなかの歴史——個人的経験から公的演出へ』（松籟社、2011年）；同（安川晴基訳）『想起の文化——忘却から対話へ』（岩波書店、2019年）。

⁷ E.g., Joan Coutu, 'Legitimizing the British Empire: the monument to General Wolfe in Westminster Abbey', in John Bonehill and Geoff Quilley (eds.), *Conflicting visions: war and visual culture in Britain and France, c. 1700-1830* (Aldershot, 2005), pp. 61-83; idem, *Persuasion and propaganda: monuments and the eighteenth-century British Empire* (Montreal and London, 2006), chapter 4; Douglas Fordham, 'Scalping: social rites of Westminster Abbey', in Tim Barringer, Geoff Quilley and Douglas Fordham (eds.), *Art and the British Empire* (Manchester and New York, 2007), pp. 99-119. 詩人コーナーについては、以下をみよ。Philip Connell, 'Death and author: Westminster Abbey and the meanings of the literary monument', *Eighteenth-Century Studies*, xxxviii (2005), pp. 557-85; Thomas A. Prendergast, *Poetical dust: poet's corner and the making of Britain* (Philadelphia, 2015).

⁸ Matthew Craske, 'Westminster Abbey, 1720-70: a public pantheon built upon private interest', in Richard Wrigley and Matthew Craske (eds.), *Pantheons: transformations of a monumental idea* (Aldershot, 2004), pp. 57-79. 同じ著者による次の論考もみよ。Idem, 'Making national heroes? A survey of the social and political functions and meanings of major British funeral monuments to naval and military figures, 1730-70', in Bonehill and Quilley, *Conflicting visions*, pp. 41-59. Cf. Idem, *The silent rhetoric of the body: a history of monumental sculpture and commemorative art in England, 1720-1770* (New Haven and London, 2007).

Papers) から利用可能である⁹。もうひとつは、イングランドの歴史的記念建造物を調査・記録するために、1908年に設置された王立委員会によるものだが、1910年以降、イングランドの各州の歴史的建造物の目録として逐次刊行され、現在は、ロンドン大学歴史学研究所が管理・運営する「イギリス史オンライン (British Historical Online)」から利用できる¹⁰。ロンドンだけで全5巻で構成され、第1巻はウェストミンスター寺院にあてられている¹¹。

王立委員会の報告書や刊行物にくわえて、本研究にとって重要なのは、ウェストミンスター寺院の公式ウェブサイトである¹²。このウェブサイトは、記念される著名人のデータベースとしての特徴も備えており、モニュメントや墓について、人物の簡単な伝記的記述や建立された年と場所、あるいは制作を担当した彫刻家や碑文のような情報を広く調べることができる。それ以外は、各種の議会資料や当時の新聞・定期刊行物などを必要におうじて利用した。

1. ウェストミンスター寺院の埋葬者とその特徴

ウェストミンスター寺院には何人埋葬されたのか。モニュメントは何体建立されたのか。その特徴をどう考えるべきなのか。ウェストミンスター寺院のウェブサイトには、3,300人以上が埋葬ないし記念されているとある。たしかに驚くべき数字ではあるものの、ウェブから得られる情報だけでは、本稿の目的に迫ることはできない。本章と次章では、議論の前提として、ここにあげた問いへの回答を試みることにしたい。

まず、埋葬者数を確認しておこう (図1)。1600年から1890年のおよそ3世紀間に、2,923人が埋葬されたことが議会資料から判明する。その内訳をみると、ウェストミンスター寺院の教会本体には1,173人、寺院の南側に位置する回廊には1,750人が埋葬された。時系列上の推移にかんしては、17世紀、とりわけ1660年代から80年代にかけての王政復古期に、教会も回廊も埋葬者数が急増しており、1670年代には、1年あたり平均して26人が埋葬されたことになる。1710年代と20年代には、1年あたりの埋葬者数は20人を超えたものの、その後は大きく減少してゆく。1820年代以降は1年あたり4人以下となり、埋葬者がいない年もあった。

⁹ 'First report of the royal commission appointed to inquire into the present want of space for monuments in Westminster Abbey, with minutes of evidence and appendices', *House of Commons Parliamentary Papers*, xlv (1890-1), 575 (c. 6228); 'Final report of the royal commission appointed to inquire into the present want of space for monuments in Westminster Abbey, with appendices', *ibid.*, xlv (1890-1), 701 (c. 6398).

¹⁰ URL=<https://www.british-history.ac.uk>.

¹¹ Royal Commission on Historical Monuments (England), *An inventory of the historical monuments in London I: Westminster Abbey* (London, 1924).

¹² URL=<https://www.westminster-abbey.org>. とくに断らないかぎり、以下本稿においては、モニュメントのデザインや碑文、あるいは記念される人物についての情報は、ウェストミンスター寺院のウェブサイトか、『オクスフォード国民伝記事典』(*Oxford Dictionary of National Biography*, URL= <https://www.oxforddnb.com>) の項目に依拠したものである。

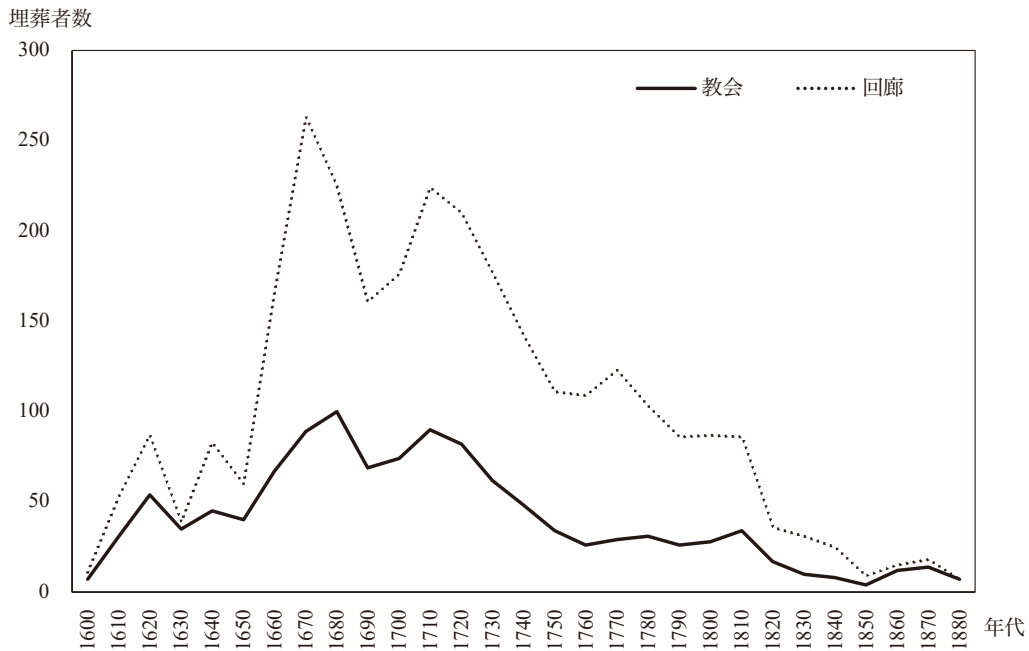


図1 ウェストミンスター寺院の埋葬者数、1600-1890年

典拠：'First report of the royal commission appointed to inquire into the present want of space for monuments in Westminster Abbey, with minutes of evidence and appendices', *House of Commons Parliamentary Papers*, xlv (1890-1), 575 (c. 6228), Appendix Nos. V-VII, XIII, XV and XXI より作成。

それでは、どのような人物がウェストミンスター寺院に埋葬されたのか。ただちに確認できるのは、教会と回廊で、埋葬者の地位や社会層に大きな隔たりが存在したことである。とくに回廊の埋葬者のほとんどは、無名としか表現しようのない人びとばかりであった。ウェストミンスター寺院の下級聖職者や寺院で働く大工や石工、あるいはオルガン奏者や聖歌隊員、さらには寺院に隣接するウェストミンスター校の生徒など、寺院に関係する人びとが目立つ。これにたいして、身廊や南北の両翼廊、ヘンリ7世礼拝堂など、教会のほうに埋葬された人物は、後述するモニュメントと共通するが、政治家や軍人、文筆家、貴族など、著名人が中心となる。聖職者の場合、ウェストミンスター寺院の首席司祭（長い18世紀においては、多くの場合、ロチェスタ主教を兼任していた）のような高級聖職者に限定される。

その一方で、回廊ほどではないにせよ、ウェストミンスター寺院の教会本体も埋葬者の数が多かったのは、配偶者や子どもなど、近親者も一緒に埋葬されることも少なくなかったからである。一例をあげよう。1778年に死去した初代チャタム伯ウィリアム・ピット（大ピット）**【143】**¹³は、国葬を

¹³【 】のなかの数字は、論文末の付表の整理番号に対応している。

もって弔われたのち¹⁴、寺院の北翼廊に葬られた。それから28年後の1806年、彼の次男で同名のウィリアム・ピット（小ピット）【144】もまた、国葬ののち父親と同じ場所に埋葬されたのである。父子そろって首相になったばかりか、国葬の榮譽を浴し、しかも国費によりナショナル・モニュメントも建立された例はほかに存在しない。だが、話はこれだけにとどまらない。大ピットの長男である第2代チャタム伯ジョン・ピット（1835年死去）や息女ハリエット（1786年）、初代と第2代それぞれのチャタム伯の夫人であるヘスター（1803年）とメアリ・エリザベス（1821年）も、父親もしくは夫が眠る場所に葬られたのである¹⁵。

ウェストミンスター寺院への埋葬の問題を考えるうえで、無視できないことがある。故人の埋葬やモニュメント建立が認められたとしても、寺院の首席司祭と聖堂参事会に「謝金 (fine)」を支払わなければならなかったのである。18世紀において、この「謝金」はたえず非難的だった。ホレス・ウォルポールも、首席司祭と聖堂参事会がカネ目当てに「何度も何度も教会を売りに出した」と断じたほどである¹⁶。とはいえ、中世以来の古い教会の建物の維持と修理にあたり、議会による国費の支出がそれほど頼りにはならなかった以上、ここでいう「謝金」は、寺院当局の腐敗のあらわれというよりも、一面ではやむを得ないものがあつたと考えられる。

この「謝金」については、議会資料から19世紀前半の詳細が確認できる¹⁷。それによると、少なくとも埋葬の場合は、30ポンドから130ポンド程度支払う必要があつた。1833年に亡くなったウィリアム・ウィルバフォース【207】の場合、ウェストミンスター寺院での葬儀と埋葬、モニュメント建立のためにおよそ340ポンドの「謝金」を要した。葬儀の準備やモニュメントの制作にかかった経費を考慮すると、さらに高額になったにちがいない。ちなみに、国費によるモニュメントの建立や国葬の場合は「謝金」の支払いを免除された。

仮に国家的な著名人であつたとしても、埋葬やモニュメント建立がつねに許されたわけではなかつた。時期にもよるが、教会での埋葬や記念である以上、ことに故人の信仰やモラルが問われただろう。詩人のバイロン卿の埋葬とモニュメント建立がをめぐる経緯が、その顕著な例である。

バイロンがギリシア独立戦争に参戦し、1824年4月にギリシア西部のミソロンギで客死したこ

¹⁴ 近代イギリスにおける国葬 (state funeral) とは、狭義には、紋章院 (the College of Arms) の差配のもと、国費により挙行された葬儀をさす。Cf. John Wolfe, *Great deaths: grieving, religion and nationhood in Victorian and Edwardian Britain* (Oxford, 2000).

¹⁵ Joseph Lemuel Chester (ed.), *The marriage, baptismal and burial registers of the Collegiate Church or Abbey of St Peter, Westminster* (London, 1876), pp. 426, 442, 469, 472, 497, 507.

¹⁶ W. S. Lewis, A. D. Wallace, et al. (eds.), *The Yale edition of Horace Walpole's correspondence*, 48 vols (New Haven and London, 1937-83), xxxviii, pp. 109-12: Horace Walpole to Henry Seymour Conway, 5 August 1761.

¹⁷ 'Returns of fees charged and received by the dean and chapter of Westminster, for funerals and monuments in the Abbey; and of the annual amount of money received for admission to see the monuments in the Abbey and St Paul's, from 1827 to 1836', *House of Commons Parliamentary Papers*, xli (1837), 242, pp. 2-3.

とは広く知られている¹⁸。同年7月に、彼の遺体はロンドンに到着し公開弔問が実施された。前後して、ウェストミンスター寺院へのバイロンの埋葬が非公式に提案されたものの、首席司祭ジョン・アイルランドは、生前のバイロンのキリスト者にふさわしからぬ素行から、教会人として受諾できないと返答したのである。その後、バイロンの大学時代からの友人であるサー・ジョン・ホブハウスを中心にバイロンのモニュメント建立のために委員会が組織され、デンマーク人彫刻家ベルテル・トルヴァルセンに制作が委託された。1834年にモニュメントは完成し、ホブハウスらはウェストミンスター寺院への設置をアイルランドに申し出たが、首席司祭は同じ理由でまたもや拒絶したのである¹⁹。詩人コーナーにバイロンのメモリアルが設置されたのは、彼の死から一世紀半近い歳月が流れた1969年のことだった。

本章での考察を終えるうえで、やはり君主をはじめとする王室の埋葬の問題にふれておかななくてはならないだろう。13世紀のヘンリ3世以降、歴代の国王とその配偶者、子女たちが、ウェストミンスター寺院に埋葬されるのが一般的となっていた²⁰。このような「伝統」は、ハノーヴァ朝時代に大きく変化することになる。ジョージ2世を最後にして、その後の王室のメンバーは、ウィンザ城のセント・ジョージ礼拝堂にもっぱら埋葬されることになったのである。王室の埋葬にみられる変化は、とくに紋章院の関与のあり方から、国王葬儀の性格が「公事」から「私事」に変化したことと重ねて考えられることが多い²¹。ただしこの問題は、ハノーヴァ朝とその君主をめぐる近年の再評価とふまえて、今後さらに考察を深めなければならない²²。ジャコバイトの反乱が終息し、ステュ

¹⁸ 本段落の記述は、ホブハウスが残した次の史料をふまえたものである。John Cam Hobhouse, *Lord Broughton, Travels in Albania in 1809 and 1810*, new edn, 2 vols (London, 1858), i, pp. 522-44: 'Remarks on the exclusion of Lord Byron's monument from Westminster Abbey'. バイロンのモニュメント建立とウェストミンスター寺院の拒絶については、以下の研究も参照されたい。Maurizio Ascari, 'Not in a Christian church: Westminster Abbey and the memorialisation of Byron', *Byron Journal*, xxxvii (2009), pp. 141-9; Prendergast, *Poetical dust*, chapter 4.

¹⁹ ドイツ人のシェイクスピア研究者カール・エルツェが著したバイロンの伝記によると、ホブハウスを中心とする委員会は、ウェストミンスター寺院だけでなく、セント・ポール大聖堂や英国博物館、ナショナル・ギャラリーにもモニュメントの設置をもとめたが、どこからも拒絶されたという。Karl Elze, *Lord Byron: a biography with a critical essay on his place in literature* (London, 1872), p. 66. このバイロンのモニュメントは、最終的には、彼の母校であるケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの図書館のなかに設置された。

²⁰ 歴代のイギリス王や王室のメンバーの埋葬地を調べるにあたり、Aidan Dodson, *The royal tombs of Great Britain: an illustrated history* (London, 2004) が有用である。

²¹ Paul S. Fritz, 'From 'public' to 'private': the royal funerals in England, 1500-1830', in Joachim Whaley (ed.), *Mirrors of mortality: studies in the social history of death* (London, 1981), pp. 61-79. 指昭博「近世イングランドの国王葬儀——エリザベス1世の葬列を中心に」、江川温・中村生雄編『死の文化誌——心性・習俗・社会』（昭和堂、2002年）、145 - 66頁も参照されたい。こうした動きと関係するだろうが、ウェストミンスター寺院の参事会は、ヘンリ7世礼拝堂へのさらなるモニュメント建立を1740年に禁止したとされる。William Whyte, 'Old corruption and new horizons: 1714-1837', in Cannadine, *Westminster Abbey*, pp. 222-69, esp. p. 259.

²² E.g., Hannah Smith, *Georgian monarchy: politics and culture, 1714-1760* (Cambridge, 2006); Andreas Gestrich and Michael Schaich (eds.), *The Hanoverian succession: dynastic politics and monarchical culture* (Farnham, 2015).

アート朝による王位継承の可能性がなくなるまで、ハノーヴァ朝の正統性はなお問われる状況にあった。それゆえにジョージ1世もジョージ2世も、ウェストミンスター寺院という、歴史的記憶が重層した空間を介して、歴代の君主とのつながりを強調しようとした。いわば外国出身のハノーヴァ朝君主の「イギリス化 (Anglicisation)」がめざされたのである。ジョージ1世の場合、1725年にバス勲章を創設し、その礼拝堂としてウェストミンスター寺院ヘンリ7世礼拝堂を設定したのはそのためであろう²³。ジョージ2世にいたっては、同じくヘンリ7世礼拝堂の地下に、自分とその家族のための墓所を新たに設けたほどである²⁴。国王とその近親者の埋葬にかんしては、少なくとも18世紀末までは、中世以来の「伝統」が継続していたと考えたほうがよい。

2. ウェストミンスター寺院のモニュメントと「軍事化」

埋葬者の数とくらべると、ウェストミンスター寺院に建立されたモニュメントの数ははるかに少ない。本稿が対象とした1700年から1850年にかけての埋葬者数は、教会が599人、回廊が1,127人、合計で1,726人であったのにたいして、モニュメントの数は、教会が215体、回廊が74体、合計289体と埋葬者数の6分の1でしかない。いいかえると、ウェストミンスター寺院へのモニュメント建立とは、特別でより限られた記念や追悼のあり方なのだ。また、回廊よりも教会のほうに建立されるモニュメントの数が3倍近く多い一方で、これら2つの空間のあいだに、記念される人物の地位や業績、名声に大きな隔たりがあることは埋葬者の場合と何ら変わらない。しかもウェストミンスター寺院の教会本体に埋葬されることなく、モニュメントだけが建立された例は約半数の105体を数える。これ以降の考察は、教会に建立されたモニュメントに限定して進めることにする。

時系列上の推移を確認しておく(図2)。埋葬者数が1710年代・20年代以降、大きく減少していったのとは異なり、モニュメントの建立数には、そのような目立った変化はうかがえない。1700年から1850年にかけて、1年あたりの平均は1.4体、多いときで約2体となり、1750年代を別にすれば、とくに増減が大きかった年代はみられない。18世紀後半以降、ウェストミンスター寺院はモニュメントや墓でひどく混雑し、大きな問題となっていたとはいえ、19世紀に入っても、モニュメント建立の機会はそれほど失われていなかったのである。

どのような人物のモニュメントが建立されたのか。職業で分類して考えた場合、軍人のモニュメントが最も多く、その数は71体と全体の33パーセントの比率になる。それに続くのが、文人・芸術家(41体、19パーセント)、政治家(36体、17パーセント)、聖職者(18体、8パーセント)、科学者・技術者(17体、8パーセント)となる。

²³ Andrew Hanham, 'The politics of chivalry: Sir Robert Walpole, the Duke of Montagu and the Order of the Bath', *Parliamentary History*, xxxv (2016), pp. 262-97, esp. pp. 275, 277, 293.

²⁴ Thomas Cocke, 'The repository of our English kings': the Henry VII Chapel as royal mausoleum', *Architectural History*, xlv (2001), pp. 212-20.

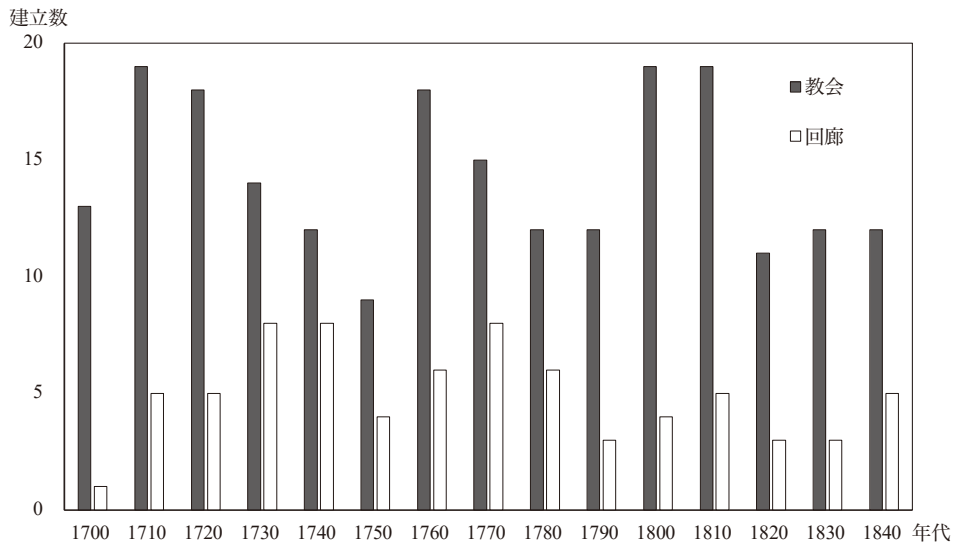


図2 ウェストミンスター寺院のモニュメント数、1700-1850年

典拠：Royal Commission on Historical Monuments (England), *An inventory of the historical monuments in London I: Westminster Abbey* (London, 1924), pp. 101-10; Westminster Abbey official website (URL=<https://www.westminster-abbey.org>); *Oxford Dictionary of National Biography* (URL= <https://www.oxforddnb.com>) より作成。

職業ごとのモニュメントの分類について、時系列上の変化を確認しても、同様の結果が得られる。表1は、四半世紀ごとのモニュメントの建立数をあらわしたもののだが、最後の時期にあたる19世紀の第二四半期を除き、軍人のモニュメントの数がつねに最大であった。このような数字は、長い18世紀が、英仏間の第2次百年戦争と連動した時代であったことを考えると、さして驚くには値しないかもしれない。だが少し視点を変えて考えてはどうだろうか。近年、長い18世紀の英仏抗争の頻度や規模、インパクトを再考するために、オーストリア継承戦争において英仏両国が交戦状態に入った1744年から、ナポレオン戦争が終結する1815年までを「七十年戦争」とする見解が、しだいに広まりつつある²⁵。このおよそ70年間に、ウェストミンスター寺院に建立された軍人のモニュメントの数は計104体のうちの48体、全体の46パーセントというまことに高い比率となる。英仏抗争がいつそう激しさを増した18世紀中葉から19世紀初頭にかけては、ウェストミンスター寺院の「軍事化」と呼ぶべき現象が生じていたと考えられよう。

²⁵ Anthony Page, *Britain and the Seventy Years War, 1744-1815: enlightenment, revolution and empire* (Basingstoke and New York, 2015); idem, 'The Seventy Years War, 1744-1815, and Britain's fiscal-naval state', *War & Society*, xxxiv (2015), pp. 162-86.

表1 ウェストミンスター寺院に建立されたモニュメント、1700-1850年：職業による分類

年	軍人		文人・芸術家		政治家		聖職者		科学者・技術者		その他	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
1700-1725	11	26.8	8	19.5	7	17.1	6	14.6	0	0.0	9	22.0
1725-1750	12	34.3	9	25.7	3	8.6	2	5.7	5	14.3	4	11.4
1750-1775	15	45.5	5	15.2	3	9.1	2	6.1	2	6.1	6	18.2
1775-1800	13	39.4	7	21.2	4	12.1	2	6.1	2	6.1	5	15.2
1800-1825	16	36.4	8	18.2	9	20.5	3	6.8	2	4.5	6	13.6
1825-1850	4	13.8	4	13.8	10	34.5	3	10.3	6	20.7	2	6.9
合計	71	33.0	41	19.1	36	16.7	18	8.4	17	7.9	32	14.9

表2 ウェストミンスター寺院に建立された軍人のモニュメント、1700-1850年：位階による分類

	将官		佐官		その他	
	数	%	数	%	数	%
海軍	19	63.3	9	30.0	2	6.7
陸軍	26	63.4	9	22.0	6	14.6

典拠：表1・表2ともに、*An inventory of the historical monuments in London I*, pp. 101-10; Westminster Abbey official website; *Oxford Dictionary of National Biography* より作成。

3. 軍人のモニュメントとイギリス帝国の拡大

これまでの議論をふまえて、本章では、軍人のモニュメントに焦点をあてて、考察をさらに進めることにしよう。表2は、軍人のモニュメントの数を位階ごとに整理したものである。陸軍士官のモニュメントのほうが数は多いものの、将校団の規模の違いを考慮すると、むしろ海軍士官のモニュメントは相対的に多く建立されたとみなすことができる。また全モニュメントの60パーセント以上が将官の地位にある軍人のために建立されたこと、将官以外では、海軍であれば勅任艦長、陸軍であれば大佐や中佐、少佐の位階にあったことから、記念の対象が高級軍人にほぼ限定されていたことが確認される。長い18世紀においては、准士官や下士官、一般の兵士がウェストミンスター寺院で記念されることはほとんどなかったのである²⁶。

続いて、記念される軍人の死因や、誰がモニュメントを建立したのかをみておく。死因のうち、少なくない数を占めるのが戦死で、71体中22体のモニュメントが該当する。また戦死ではないにせよ、戦地における病死や、遭難など不遇の事故による死のような理由から記念された例は15体を数える——ひるがえっていうと、記念される軍人たちの多くは、戦場から遠く離れたベッドのうえで安らかに眠りについたわけだ。とまれ、こうしたモニュメントが、しばしば「公的」あるいは

²⁶ 正士官でないにもかかわらず、モニュメントが建立された唯一の例は、海軍の士官候補生であったウィリアム・ダルリンブルのモニュメント【57】である。これは、1782年に18歳の若さで戦死した彼を悼んで、両親が建立したものである。

「国民的」な性格を帯びていたことに注意しなければならない。その傾向は、イギリスが非ヨーロッパ世界で圧倒的な優位を築き、帝国拡大をうながした七年戦争（1756－63年）以降強まってゆく。

そのようなモニュメントのなかで、最初に言及しておかなくてはならないのは、庶民院が国費による建立を決議した例である。ジェイムズ・コーンウォル艦長（1747年）【50】、ジェイムズ・ウルフ將軍（1759年）【211】、レ・サントの戦いで戦死した3人の艦長（1782年）【13】、「栄光の6月1日」の戦いで戦死したジェイムズ・モンタギュー艦長（1794年）【132】とハーヴェイとハット両艦長のモニュメント（1794年）【88】の計5体のモニュメントが議会決議により建立された。コーンウォル以外の軍人は、議会の感謝決議の対象となった戦いで戦死したという点で共通している²⁷。

なるほど、コーンウォル艦長のモニュメントは、庶民院が建立を認めた最初のモニュメントであるゆえに特筆に値するかもしれない²⁸。ブリタニアを表象する像が用いられた最初の例ともされる。しかし、イギリスの勝利や英雄の死を記念するために、コーンウォルのモニュメントが建立されたと単純に考えるわけにはいかない。彼が戦死した1744年のトゥーロン沖の戦いとは、地中海艦隊司令長官トマス・マシューズ提督と副司令官リチャード・レストック提督の不仲からイギリス艦隊が撤退し、政治スキャンダルに発展したことで知られる²⁹。コーンウォルのモニュメント建立は、汚名を着せられた彼の名誉回復と失態を犯した士官たちへの懲罰を含蓄していた³⁰。彼のモニュメント建立の決議に先立ち、地中海艦隊の司令官ならびに士官を譴責する全院委員会の報告が決議されたのである。ウォルポール内閣の退陣後も余塵くすぶる野党の対立という当時の政治状況もふまえて、コーンウォルのモニュメント建立の意味を考えなければならない³¹。

コーンウォルよりもむしろ、最初の「帝国の殉教者」と呼ぶにふさわしいウルフ將軍のモニュメントのほうが、イギリスにおける軍人のコメモレイションを考えるうえで重要な意味をもつ³²。

²⁷ 議会による感謝決議の意味については、中村武司「ネルソン提督の再来？——ナポレオン戦争時代のイギリス海軍の「神話」とコクリン卿」、『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）、第1号（2016年）、91－3頁をみよ。

²⁸ *The history, debates and proceedings of both Houses of Parliament of Great Britain, from the year 1743 to the year 1774*, 7 vols (London, 1792), ii, pp. 137-8: Commons, 28 May 1747.

²⁹ P. A. Luff, 'Matthews v. Lestock: parliament, politics and the navy in mid-eighteenth-century England', *Parliamentary History*, x (1991), pp. 45-62がこの問題を詳細に検討している。Cf. Bob Harris, *Politics and the nation: Britain in the mid-eighteenth century* (Oxford, 2002), pp. 122-3; Sarah Kinkel, *Disciplining the empire: politics, governance and the rise of the British navy* (Cambridge: MA and London, 2018), pp. 98-99.

³⁰ *Journals of the House of Commons*, xxv, p. 397: 28 May 1747. Cf. Lewis, et al., *The Yale edition of Horace Walpole's correspondence*, xxxvii, pp. 269-71: Horace Walpole to Henry Seymour Conway, 8 June 1747.

³¹ E.g., Coutu, *Persuasion and propaganda*, pp. 121-2, 159-60.

³² ウェストミンスター寺院へのウルフのモニュメント建立にかんしては、註7にあげたジョアン・コウツやダグラス・フォーダムによる研究に詳しい。絵画や文学作品などにおけるウルフ將軍の記念や表象の問題については、Alan McNairn, *Behold the hero: General Wolfe and the arts in the eighteenth century* (Montreal and London, 1997); Nicholas Rogers, 'Brave Wolfe: the making of a hero', in Kathleen Wilson (ed.), *A new imperial history: culture, identity and modernity in Britain and the Empire, 1660-1840* (Cambridge, 2004), pp. 239-59.

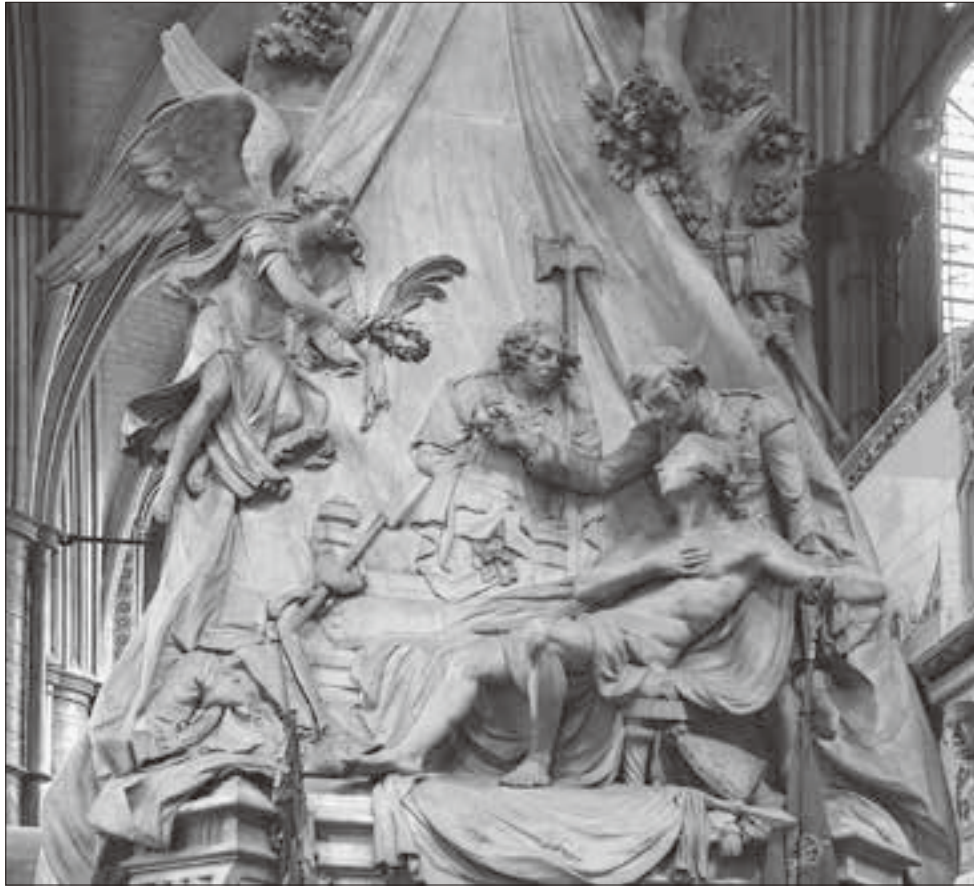


図3 ジョウジフ・ウィルトン、ジェイムズ・ウルフ将軍のモニュメント(1772年)
典拠：Carole McNamara, *Benjamin West: General Wolfe and the art of empire* (Michigan, 2012), p. 39.

1759年9月13日のケベックの戦いから約2ヵ月が経過した1759年11月21日、大ピットは庶民院において亡き将軍のモニュメント建立をもとめる国王あての上奏文を提案し、満場一致で決議された³³。その直後から、モニュメントのデザイン選考のためコンペが実施され、最終的に制作が委託されたのは、イングランド出身の彫刻家ジョウジフ・ウィルトンであった。いくどかのデザインや構成の変更を経て、モニュメントが完成したのは、ウルフの死から13年が経過した1772年のことである。

ウィルトンが制作したウルフ将軍のモニュメントとは、古代と同時代、さらには宗教的な要素の融合あるいは折衷というべきものだった(図3)。モニュメント全体は陣営地のテントを模したピラミッド型をなしており、ほぼ裸体で表象されたウルフが勝利の瞬間に死を迎えつつある情景をあ

³³ *Journals of the House of Commons*, xxviii, p. 643; 21 November 1759; Horace Walpole, *Memoirs of King George II*, edited by John Brooke, 3 vols (New Haven and London, 1985), iii, p. 80.

らわしていた。このモニュメントをめぐるには、さしあたり2つの特徴が指摘できる。ひとつは、ハイランド連隊の兵士の存在である。ひとは右側から横たわる将軍を支え、もうひとは長柄の斧を左手で抱えながら、彼を見守る姿で表象されている。続いて視線を碑文の真上に向けると、百合の紋章が刺繍されたフランス軍旗が、ウルフによって踏みしだかれているのを目にするだろう。このような構成から、ウルフ将軍のモニュメントには、イギリス（ブリテン）の国民統合や反フランス感情を強めようとするねらいがあったと考えられる。とりわけハイランド連隊兵士の存在は、大ピットが帝国拡大の尖兵として重視していたゆえに関心を引く³⁴。モニュメントの碑文も、彼が提案した上奏文の一節、「能力と勇敢さにより、策略と自然がもたらすあらゆる障害を乗り越えながらも、勝利の瞬間に殺害された」が刻まれた。つまり大ピットの意向や主導のもと、ウルフ将軍のモニュメント建立は進められたといえるわけだが³⁵、皮肉なことに、モニュメントが完成したころには、彼がめざした帝国は解体の危機に瀕していたのである。

公的な性格が強いという意味では、東インド会社や北アメリカの植民地議会が建立した例も無視できない。こうしたモニュメントの場合、帝国形成との関係はより明白だろう。前者にかんしては、時代順にチャールズ・ワトスン提督（1759年）【201】、ストリンガー・ローレンス将軍（1775年）【114】、サー・エア・コート将軍（1783年）【49】、エドワード・クック艦長（1799年）【47】、以上4体の軍人のモニュメントをあげることができる。彼らはみな、インドで戦功をあげたか、戦死したがゆえに東インド会社がモニュメントを建立したのだった³⁶。後者については、イギリス軍の敗北に終わったタイコンデロガの戦い（1758年）で戦死したジョージ・オーガスタス・ハウ将軍【100】を追悼すべく、マサチューセッツ湾直轄植民地の議会は、ウェストミンスター寺院にモニュメントを建立したのである³⁷。

わずかに2体を数えるにすぎないが、君主が建立を命じたモニュメントも存在する。ひとつは、サー・クロウズリ・ショヴェル提督のモニュメント【163】である。彼は、17世紀後半以降のオランダやフランスとの戦いで功を成した名提督として知られている。スペイン継承戦争のさなかの1707年10月、ショヴェル率いる艦隊が悪天候に巻き込まれた結果、コーンウォール半島西方のシリ諸島沖において4隻の戦列艦が沈没し、彼自身を含む2,000人近い犠牲者を出す大惨事となった。その死を深く悼んだアン女王の命により、ショヴェルはウェストミンスター寺院における国葬のち埋葬された。その後、碑文にあるように「彼の変わらぬ忠誠心とたぐいまれな徳」を記念すべく、

³⁴ William Cobbett (ed.), *The parliamentary history of England: from the Norman Conquest, in 1066 to the year 1803*, 36 vols (London, 1806-20), xvi, col. 98: Commons, 14 January 1766. Cf. Andrew Mackillop, *More fruitful than the soil': army, empire and the Scottish Highlands, 1715-1815* (East Linton, 2000), chapter 6; T. M. Devine, 'Soldiers of empire, 1750-1914', in John M. MacKenzie and T. M. Devine (eds.), *Scotland and the British Empire* (Oxford, 2011), pp. 176-95.

³⁵ コウツはとくにこのことを強調している。Coutu, *Persuasion and propaganda*.

³⁶ *Ibid.*, pp. 140-2, 274-5, 277-84.

³⁷ *Ibid.*, pp. 110-13.

グリーンリン・ギボンズが制作したモニュメントが建立されたのである³⁸。

君主の命により建立されたもうひとつのモニュメントは、ジョン・アンドレ少佐【3】に捧げられたものである³⁹。彼の悲劇的な死は、アメリカ大陸軍の元将軍ベネディクト・アーノルドがウェストポイント要塞をイギリス軍に明け渡そうとする陰謀に関与したことによる。1780年9月、アーノルドとの連絡を終えたアンドレは、イギリス軍支配地への帰還の途上、アメリカ人民兵に逮捕された。アンドレが名前と服装を偽っていたことから、ジョージ・ワシントン主宰による軍法会議の結果、彼は軍人としてではなく、スパイとして絞首刑に処されたのである。しかし、死を前にしたアンドレの男らしく肅然としたふるまいは、イギリス人とアメリカ人の双方に深い感銘を与えた。モニュメントの碑文にも、こう記されている。「彼が奉職した軍隊に広く愛され尊敬されており、敵さえも〔彼の死を〕嘆き悲しんだのである」。1821年には、ヨーク公の命によって、アンドレの遺体はウェストミンスター寺院に移葬された。

このような「公的」もしくは「国民的」なモニュメントは12体を数える。これにたいして、軍人のモニュメントに限定しても、結局のところ、その大半が遺族や友人、遺言執行人など、いわば個人の利害関心から建立されたのだった。紙幅の関係上、詳述はできないものの、いくつかの例をとりあげて以下で説明しよう。

サー・チャールズ・ウェイジャ【196】、サー・ピーター・ウォレン【200】、エドワード・ヴァーノン【191】の3人はみな名提督であるばかりか、イギリス最大の有権者数を誇る都市選挙区にして、ウェストミンスター寺院のお膝元であるウェストミンスター市の選挙戦にかかわったことで共通している⁴⁰。ウェイジャは、ウォルポール政権で海軍大臣の職にあったことでも知られる一方⁴¹、ウォレンは第1次フィニステールの戦い(1747年)の勝者として、ヴァーノンもポルト・ベロ(1739年)での目覚ましい勝利から国民的英雄として称賛されていた⁴²。高い名声を誇ったにせよ、彼らのモニュメントを建立したのは議会や君主ではなく、遺族や友人たちであった。ウェイジャのモニュメ

³⁸ John B. Hattendorf, 'Sir George Rooke and Sir Cloudesly Shovell', c. 1650-1709 and 1650-1707, in Peter Le Fevre and Richard Harding (eds.), *Precursors of Nelson: British admirals of the eighteenth century* (London, 2000), pp. 43-77, esp. pp. 73-4. このシリ諸島沖の大惨事が新たな経度測定法をうながしたとされる。石橋悠人『経度の発見と大英帝国』(三重大学出版会、2010年)、28-9頁。

³⁹ Holger Hoock, *Empires of the imagination: politics, war and the arts in the British world, 1750-1850* (London, 2010), pp. 60-71.

⁴⁰ 長い18世紀のウェストミンスター選挙区と海軍の英雄の当選の意味については、次の拙稿をみよ。中村武司「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」、1780-1806年」、『西洋史学』254号(2014年)、19-37頁。

⁴¹ Daniel A. Baugh, 'Sir Charles Wager, 1666-1743', in Le Fevre and Harding, *Precursors of Nelson*, pp. 101-26.

⁴² ウォレン提督については、Julian Gwyn, *An admiral for America: Sir Peter Warren, Vice Admiral of the Red, 1703-1752* (Gainesville: FL, 2004) や薩摩真介『〈海賊〉の大英帝国——略奪と交易の400年史』(講談社: 講談社選書メチエ、2018年)、204-10頁をみよ。ヴァーノンの勝利がもつ意味と18世紀の民衆の帝国主義については、Kathleen Wilson, *The sense of the people: politics, culture and imperialism in England, 1715-1783* (Cambridge, 1995), chapter 3 をみよ。

メントは、彼の友人であるフランシス・ガシュリが「偉大なるパトロン」に捧げるべく建立したものであった⁴³。ヴァーノンの場合、モニュメントを建立したのは、彼の甥であるオーウェル卿（のちの初代シップブルック伯）である。ちなみに、ウェイジャとヴァーノンはウェストミンスター寺院に埋葬されたのにたいして、ウォレンは生まれ故郷のアイランドはウォレンズタウンの教区教会に葬られたのち、彼の未亡人がモニュメントを捧げたのである。遺族や友人などによる建立が明確に確認できる軍人のモニュメントは34体に数え、全体の半数近くを占めていたことになる。

19世紀以降に増えてゆくのは、亡くなった軍人の同僚や部下たちが資金を募ってモニュメントを建立するケースである。6体のモニュメントがそれに該当するものの、サー・ジョージ・ホープ提督【96】とクート・マニングム将軍【124】の2人の将官を除くと、リチャード・クリード【54】、サー・リチャード・フレッチャ【67】、ジョージ・オーガスタス・フレデリック・レイク【113】、チャールズ・マクラウド【122】ら4人の陸軍士官はみな戦死したことで共通する。一例をあげておこう。レイクは、父親であるジェラルド・レイク卿にしたがって、アイランドやインドなどを従軍した歴戦の軍人であったが、半島戦役にて英仏両軍が初めて交戦したロリサの戦い（1808年）で戦死した。イギリス軍が勝利したにもかかわらず、議会は感謝決議を採択しなかったうえに、レイク自身の位階がそれほど高くはなかったせいか、モニュメント建立が提案されることはなかった。その後、彼の同僚の士官や下士官、兵士たちによって、ウェストミンスター寺院にレイクを追悼するモニュメントが建立されたのである。

4. ウェストミンスター寺院からセント・ポール大聖堂へ

ウェストミンスター寺院に建立されたモニュメント、とりわけ軍人のモニュメントを考えるうえで重要なのは、七年戦争とそれともなうイギリス帝国の拡大であった。戦争の勝利の熱狂がまだ冷めやらぬ1765年に、ロンドンを訪れたピエール・ジャン・グロレはこう記している。「ウェストミンスター寺院は、先の戦争におけるイングランドの成功にまつわる新しいモニュメントを日々受け入れている」⁴⁴。その結果、ウェストミンスター寺院には、「帝国の記憶の場」が構成されていったのではないだろうか⁴⁵。それからおよそ1世紀後に、たとえば、寺院の首席司祭アーサー・ペンリン・スタンリが著した『ウェストミンスター寺院の歴史的年代記』にも、以下のような記述が認められる。ここから、アメリカとアジアのイギリス帝国における勝利と英雄の記憶が、依然としてウェストミンスター寺院で共存していたと考えてよいかもしれない。

⁴³ Baugh, 'Sir Charles Wager', pp. 125–6.

⁴⁴ Grosley, *A tour to London*, i, p. 102.

⁴⁵ Cf. Dominik Geppert and Frank Lorenz Müller (eds.), *Sites of imperial memory: commemorating colonial rule in the nineteenth and twentieth centuries* (Manchester, 2015).

いまや初めて一方ではインドが、他方では北アメリカがウェストミンスター寺院に姿をあらわしたのである。ワトソン提督のモニュメントにみられる棕櫚の木と東洋の族長の姿は、カルカッタのブラックホールやシャンデルナゴルにおける彼の功績をしのばせる。サー・ジョン・クートのモニュメントにおける象やマラータの囚人や、ロレンス将軍のモニュメントにみられるトリチノポリの丘も、数年後のコロマンデル海岸とカーナティックの栄光をみる人に想起させよう。……マサチューセッツとタイコンデロガは、われわれ[の記憶]のなかではいまだ切り離されてはいないものの、高名な提督[リチャード・ハウ伯のこと]の不運な長兄であるハウ子爵に捧げられるべく、身廊の南側廊に建立されたモニュメントにあらわれている。しかし、人目を引くこの時代のメモリアルとは、その兄の友人——火薬にとってのカノン砲であるかのごとく友人関係にあった——ウルフ将軍に捧げられたものだった⁴⁶。

ところで、その当時、ウェストミンスター寺院と対照的な様相を呈していたのが、ロンドン主教座の聖堂教会たるセント・ポール大聖堂 (St Paul's Cathedral) である。再建工事が完了した18世紀初頭以降、著名人のモニュメントや墓がほぼ存在しない状態が続いていた。おそらく唯一の例外は、大聖堂の再建築を手がけたサー・クリストファ・レンの墓である。その後1770年代になると、ロイヤル・アカデミーの初代総裁サー・ジョシュア・レノルズは、著名人の彫像や宗教画で大聖堂を飾ることを提案している⁴⁷。この提案は、大聖堂首席司祭とカンタベリー大主教、国王に支持されたものの、ロンドン主教リチャード・テリックの強硬な反対にあい挫折した。彼にすれば、レノルズの提案は、プロテスタントの教会への教皇主義の導入を意味したからである⁴⁸。大聖堂へのモニュメントの建立がようやく認められたのは、さらに20年が経過した1790年代のことだった⁴⁹。ロイヤル・アカデミーの主導のもと、公開募金によりサミュエル・ジョンソンとジョン・ハウードのモニュメントが建立され、1796年3月に除幕された。同じころ東インド会社も、サー・ウィリアム・ジョーンズの業績を称えるべく、モニュメント建立を進めた⁵⁰。これら3体のモニュメントは、いずれもジョン・ベイコン(1世)によって制作された。1792年に死去したレノルズも、大聖堂に埋

⁴⁶ Arthur Penrhyn Stanley, *Historical memorials of Westminster Abbey* (London, 1868), pp. 269–70. スタンリーの生涯については、John Witheridge, *Excellent Dr Stanley: the life of Dean Stanley of Westminster* (Norwich, 2013) に詳しい。

⁴⁷ *Annual Register*, xvi (1773), pp. 139–40; Samuel Felton, *Testimonies to the genius and memory of Sir Joshua Reynolds* (London, 1792), pp. 48–9; Sir Joshua Reynolds, *The works of Sir Joshua Reynolds ... to which is prefixed, an account of the life and writings of the author by Edmund Malone, etc.*, 2 vols (London, 1797), ii, pp. 66–7.

⁴⁸ Jeremy Gregory, 'Anglicanism and the arts: religion, culture and politics in the eighteenth century', in Jeremy Black and Jeremy Gregory (eds.), *Culture, politics and society in Britain, 1660–1800* (Manchester, 1991), pp. 82–109, esp. pp. 89–90; Clare Haynes, *Pictures and popery: art and religion in England, 1660–1760* (Aldershot, 2006), pp. 12–13.

⁴⁹ *The Public Advertiser*, 8 April 1791, p. 3. Cf. *The Times*, 25 May 1791, p. 3; 3 August 1791, p. 2; *Gentleman's Magazine*, lxvi, March 1796, pp. 179–80.

⁵⁰ Coutu, *Persuasion and propaganda*, pp. 289–90.

葬されたのち、ジョン・フラクスマンが制作したモニュメントが捧げられることとなる⁵¹。

庶民院が初めてセント・ポール大聖堂へのモニュメント建立を決議したのも、同じく1790年代ことである。1793年6月17日、ロンドン・シティ選出の庶民院議員で市長経験者でもあるサー・ウォトキン・ルイスが、ジョージ・ロドニ提督とヒースフィールド將軍のモニュメント建立を提案し、満場一致で決議されたのである⁵²。ロドニもヒースフィールドもアメリカ独立戦争の英雄で、前者は1782年4月のレ・サントの戦いでフランス艦隊に大勝したことで⁵³、後者は同年9月から翌10月にかけてのフランス・スペイン連合軍による攻撃から、ジブラルタル防衛に成功したことで勇名を馳せたのだった。

ここで注意しなければならないことがある。これら軍人のモニュメント建立を提案したのは、ときの小ピットの政権ではなく、ロンドン・シティの関係者であった。しかもシティが、セント・ポール大聖堂で著名人の記念を試みたのは、それが最初ではなかったのである。同意こそ得られなかったものの、1778年に大ピットが死去したさいには、シティはウェストミンスター寺院ではなく、セント・ポール大聖堂での国葬の挙行をもとめる請願を庶民院に提出したのだった⁵⁴。「帝国第一の都市」を自負するシティにすれば、帝国と商業利害の拡大を追求した大ピットの記憶を領有しようとするのは、むしろ当然のことであっただろう⁵⁵。ロドニとヒースフィールドの記念も、そうしたコンテキストのもとで理解する必要がある。

ただし、ロドニとヒースフィールドのモニュメントは、すぐに制作が進められることはなかった。フランス革命政府やナポレオンとの戦いで命を落とした高級軍人のモニュメントの制作が優先されたためである。ロドニのモニュメントの場合、大蔵省が建立のための資金を拠出したのは1811年のことだった。ヒースフィールドのモニュメントにいたっては、ナポレオン戦争の終結後ようやく制作が始まったのである⁵⁶。セント・ポール大聖堂において帝国の英雄の記憶を我が物とし

⁵¹ James Northcote, *The life of Sir Joshua Reynolds*, 2nd edn (London, 1819), ii, p. 335

⁵² *The Parliamentary Register, or, History of the Proceedings and Debates of the Houses of Lords and Commons*, xxxv, p. 652; Commons, 17 June 1793.

⁵³ レ・サントの戦いとその影響については、ひとまず以下の拙稿を参照されたい。中村武司「1782年のウェストミンスター補欠選挙」、『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部)、第4号(2018年)、85-100頁。

⁵⁴ *The Parliamentary Register*, ix, p. 201; Commons, 21 May 1778.

⁵⁵ ピットとロンドン・シティとの関係については、以下の文献をみよ。Nicholas Rogers, *Whigs and cities: popular politics in the age of Walpole and Pitt* (Oxford, 1989), chapter 3; Perry Gauci, *William Beckford: first prime minister of the London empire* (New Haven and London, 2013).

⁵⁶ *Parliamentary Debates*, 1st ser., xvii, cols. 511-3; Commons, 8 June 1810; *The Times*, 9 June 1810, p. 3; 11 February 1812, p. 3. ロドニのモニュメントのデザインの選考は、コリングウッド提督のモニュメントと並行しておこなわれた。The National Archives, Treasury General Out-Letter Books, T2 7/68, fos. 10-1; George Harrison to Charles Long, 24 January 1811; fo. 318; Richard Wharton to Charles Long, 10 July 1811; Kenneth Garlick, Angus Macintye and Kathryn Cave (eds.), *The diary of Joseph Farington*, 16 vols (New Haven and London, 1979-84), x, p. 3710; 14 August 1810; p. 3930; 14 May 1811. ヒースフィールドのモニュメントは、1825年までに建立されたようである。The National Archives, The Treasury Papers, T1. 4029, No. 19961; Charles Long to Lords Commissioners of the Treasury, 15 September 1823; No. 26118; Solicitor with Contracts for erecting Public Monuments, 18 December 1823; *Morning Post*, 2 November 1825, p. 2.

て記念しようとしたロンドン・シティの試みは、結果として小ピットとその後継内閣に横領されたわけだ。その後1823年までに、計33体もの軍人のモニュメントの建立が議会によって決議されることになる⁵⁷。

それでは、軍人の記念の場として、セント・ポール大聖堂がウェストミンスター寺院に取って代わったと考えてもよいのだろうか。先述のように、1790年代以降もウェストミンスター寺院への軍人のモニュメント建立が続いており、1790年から1850年にかけての数は、議会と東インド会社が建立した3体を含めると計25体となる。同時期のセント・ポール大聖堂の場合、建立された軍人のモニュメントの数は37体を数えるものの、「私的」なモニュメントは、そのなかの4体にすぎない⁵⁸。このことは、ウェストミンスター寺院が、軍人のコメモレーションにおいてなお重視されていたことを示唆していよう。しかし本稿では、さらに論じる余裕はない。残された課題については、今後あらためて取り組むことにしたい。

[付記] 本研究は、JSPS 科研費17K03158の助成を受けたものである。

⁵⁷ セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレーションについては、以下の拙稿をみよ。中村武司「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレーション」、『史林』91巻1号(2008年)、176-97頁；同「帝国の殉教者たち——ナポレオン戦争時代のイギリスにおける軍人のコメモレーション」、『人文社会論叢・人文科学篇』(弘前大学人文学部)29号(2013年)、37-58頁。

⁵⁸ この4体のモニュメントとは、レイフ・ウィレット・ミラー艦長(1799年死去)、サー・ウィリアム・ホスト艦長(1821年)、サー・パルトニ・マルカム提督(1838年)、サー・ジョン・ジョーンズ將軍(1843年)を記念するためのものである。いずれも同僚の士官や友人たちの募金により建立された。

付表 ウェストミンスター寺院のモニュメント、1700-1850年

番号	氏名	職業 ^{†1}	年 ^{†2}	設置場所	制作者
1	Addison, Joseph	文人・芸術家	1809	南翼廊	Sir Richard Westmacott
2	Agar, Charles, 1st Earl of Normanton	聖職者	1815	聖歌隊席北側廊	John Bacon II
3	André, John	軍人：陸軍少佐	1782	聖歌隊席南側廊	Robert Adam and Peter Mathias van Gelder
4	Anstey, Christopher	文人・芸術家	1805*	南翼廊	Charles Horwell
5	Arnold, Samuel	文人・芸術家	1802*	聖歌隊席北側廊	Joseph Nollekens
6	Atkyns family [Sir Edward Atkyns]	政治家	1746	南翼廊	Sir Henry Cheere
7	Baillie, Matthew	科学者・技術者	1827	セント・アンドルー礼拝堂	Sir Francis Chantrey
8	Baker, John	軍人：海軍中将	1716*	聖歌隊席北側廊	Francis Bird
9	Balchen, Sir John	軍人：海軍大将	1746	北翼廊	Peter Scheemakers
10	Banks, Thomas	文人・芸術家	1805*	聖歌隊席北側廊	
11	Barnard, William	聖職者	1768*	トリフォリウム	
12	Barton, Samuel	聖職者	1715*	南翼廊	
13	Bayne, William, William Blair and Lord Robert Manners	軍人：勅任艦長	1793	北翼廊	Joseph Nollekens
14	Beauclerk, Lord Aubrey	軍人：勅任艦長	1741*	北翼廊	Peter Scheemakers
15	Beaufoy, Mary	その他	1705*	身廊	Grimling Gibbons
16	Belaysse, Sir Henry	軍人：陸軍中将	1717*	セント・ポール礼拝堂	Peter Scheemakers
17	Bell, Andrew	聖職者	1838	聖歌隊席南側廊	William Behnes
18	Beresford, John Theophilus	軍人：陸軍中尉	1812*	福音記者ヨハネ礼拝堂	Henry Westmacott
19	Blackwood, Sir Henry	軍人：海軍中将	1832*	北翼廊	William Behnes
20	Blow, John	文人・芸術家	1708*	聖歌隊席北側廊	
21	Booth, Barton	文人・芸術家	1772	南翼廊	William Tyler
22	Boulter, Hugh	聖職者	1742*	北翼廊	Sir Henry Cheere
23	Bovey, Katherine	その他	1727*	聖歌隊席南側廊	John Michael Rysbrack
24	Bradford, Samuel	聖職者	1731*	北翼廊	Sir Henry Cheere
25	Bringfield, James	軍人：陸軍大佐	1706*	身廊	
26	Bryan, George	軍人：陸軍大尉	1809*	聖歌隊席北側廊	John Bacon II
27	Buller, Charles	政治家	1848*	北翼廊	Henry Weekes
28	Burke, Ann de, Countess of Clanricarde	その他	1733*	聖歌隊席北側廊	
29	Burland, Sir John	政治家	1776*	聖歌隊席南側廊	
30	Burney, Charles, the elder	文人・芸術家	1814*	聖歌隊席北側廊	
31	Burney, Charles, the younger	文人・芸術家	1818*	聖歌隊席南側廊	Sebastian Gahagan
32	Butler, Samuel	文人・芸術家	1721	南翼廊	John Michael Rysbrack
33	Buxton, Sir Thomas Fowell	政治家	1845*	聖歌隊席北側廊	Frederick Thrupp
34	Campbell, John, 2nd Duke of Argyll	軍人：陸軍元帥	1749	南翼廊	Louis Francois Roubiliac
35	Campbell, Sir Archibald	軍人：陸軍少将	1795	南翼廊	Joseph Wilton

番号	氏名	職業 ⁺¹	年 ⁺²	設置場所	制作者
36	Campbell, Thomas	文人・芸術家	1848	南翼廊	W. Calder Marshall
37	Canning, George	政治家	1834	北翼廊	Sir Francis Chantrey
38	Cannon, Robert	聖職者	1722*	聖歌隊席南側廊	
39	Carteret, Elizabeth, and Sir Charles Carteret	その他	1717*	聖歌隊席北側廊	
40	Carteret, Philip	その他	1711*	身廊	Claude David
41	Chamberlen, Hugh, the younger	科学者・技術者	1731	聖歌隊席北側廊	Peter Scheemakers and Laurent Delvaux
42	Chardin, Sir John	その他	1767	聖歌隊席南側廊	Sir Henry Cheere
43	Churchill, George	軍人：海軍大将	1710*	聖歌隊席南側廊	Grinling Gibbons
44	Conduitt, John	政治家	1737*	身廊	Sir Henry Cheere
45	Congreve, William	文人・芸術家	1729*	聖歌隊席南側廊	Francis Bird
46	Constable, Robert, Viscount Dunbar, and Dorothy Brudenell, Countess of Westmorland	その他	1714*	聖歌隊席北側廊	
47	Cooke, Edward	軍人：勅任艦長	1806	福音記者ヨハネ礼拝堂	John Bacon II
48	Coote, Algernon, Earl of Mountrath, and Diana, Countess of Mountrath	その他	1771	セント・マイクル礼拝堂	Sir William Chambers and Joseph Wilton
49	Coote, Sir Eyre	軍人：陸軍中将	1783*	北翼廊	Thomas Banks
50	Cornwall, James	軍人：勅任艦長	1754	身廊	Sir Robert Taylor
51	Courcy, Almericus de, Lord Kingsale	その他	1720*	聖歌隊席北側廊	
52	Craggs, James, the younger	政治家	1727	セント・ジョージ礼拝堂	James Gibbs, Giovanni Guelfi and Francis Bird
53	Creed, Richard	軍人：陸軍少佐	1704*	聖歌隊席南側廊	
54	Creed, Richard	軍人：陸軍中尉	1841*	聖歌隊席南側廊	John Thomas
55	Croft, William	文人・芸術家	1727*	聖歌隊席北側廊	
56	d'Orleans, Antoine Philippe, Due de Montpensier	その他	1830	ヘンリ7世礼拝堂	Sir Richard Westmacott
57	Dalrymple, William	軍人：海軍士官候補生	1782*	聖歌隊席南側廊	Robert Adam
58	Davidson, Susannah	その他	1767*	セント・アンドルー礼拝堂	Richard Hayward
59	Davis, John	軍人：陸軍大佐	1725*	身廊	
60	Davy, Sir Humphry	科学者・技術者	1829*	セント・アンドルー礼拝堂	Sir Francis Chantrey
61	Denham, Sir James Steuart	文人・芸術家	1780*	聖歌隊席北側廊	
62	Dryden, John	文人・芸術家	1720	南翼廊	Peter Scheemakers
63	Dunk, George Montagu, 2nd Earl of Halifax	政治家	1782	北翼廊	John Bacon I
64	Fairholm, Sophia, Marchioness of Annandale	その他	1716*	聖歌隊席南側廊	James Gibbs
65	Fitzmaurice, Francis Thomas, 3rd Earl of Kerry, and Anastasia, Countess of Kerry	その他	1818*	セント・アンドルー礼拝堂	G. Buckham
66	Fleming, James	軍人：陸軍少将	1755	聖歌隊席南側廊	Louis Francois Roubiliac
67	Fletcher, Sir Richard	軍人：陸軍中佐	1829	身廊	Edward Hodges Baily

68	Folkes, Martin		文人・芸術家	1790	聖歌隊席南側廊	William Tyler and Robert Ashton
69	Follett, Sir William Webb		政治家	1849	北翼廊	William Behnes
70	Forbes, Benjamin John, and Richard Gordon Forbes		軍人：陸軍中尉	1803	セント・アンドルー礼拝堂	John Bacon II
71	Fox, Charles James		政治家	1822	北翼廊	Sir Richard Westmacott
72	Fox, Henry, 3rd Lord Holland		政治家	1840*	身廊	
73	Freind, John		科学者・技術者	1728*	聖歌隊席南側廊	John Michael Rysbrack
74	Freke, Elizabeth, and Judith Austin		文人・芸術家	1718	聖歌隊席南側廊	
75	Garrick, David		文人・芸術家	1797	南翼廊	Henry Webber
76	Gay, John		文人・芸術家	1732*	南翼廊	John Michael Rysbrack
77	Godolphin, Sidney, Earl of Godolphin		政治家	1712*	身廊	Francis Bird
78	Goldsmith, Oliver		文人・芸術家	1774*	南翼廊	Joseph Nollekens
79	Grabe, John Ernest		文人・芸術家	1726	南翼廊	Francis Bird
80	Gray, Thomas		文人・芸術家	1778	南翼廊	John Bacon I
81	Guest, Joshua		軍人：陸軍中尉	1751	北翼廊	Sir Robert Taylor
82	Hales, Stephen		科学者・技術者	1761*	南翼廊	Joseph Wilton
83	Handel, George Frederic		文人・芸術家	1762	南翼廊	Louis Francois Roubiliac
84	Hanway, Jonas		その他	1786*	北翼廊	John Francis Moore
85	Hardy, Sir Thomas		軍人：海軍大将	1737	身廊	Sir Henry Cheere
86	Hargrave, William		軍人：陸軍中尉	1757	聖歌隊席南側廊	Louis Francois Roubiliac
87	Harrison, Sir John		軍人：海軍少将	1791*	聖歌隊席南側廊	
88	Harvey, John, and John Hutt		軍人：勅任艦長	1804	聖歌隊席南側廊	John Bacon II
89	Hastings, Warren		政治家	1818*	北翼廊	John Bacon II and Samuel Manning
90	Herbert, Edward		その他	1715*	聖歌隊席北側廊	
91	Herries, Charles		その他	1819*	聖歌隊席南側廊	Sir Francis Chantrey and Robert Smirke
92	Holles, John, 1st Duke of Newcastle		政治家	1723	北翼廊	James Gibbs and Francis Bird
93	Holmes, Charles		軍人：海軍少将	1761*	北側廊	Joseph Wilton
94	Hope, Henry		軍人：陸軍准将	1793	北翼廊	John Bacon I
95	Hope, Mary		その他	1768	南翼廊	Robert Adam and James Adam
96	Hope, Sir George		軍人：海軍少将	1818*	身廊	Peter Turnertelli
97	Horneck, William		軍人：陸軍大尉	1746*	身廊	Peter Scheemakers
98	Horner, Francis		政治家	1823	北翼廊	Sir Francis Chantrey
99	Howard, John, 4th Earl of Stafford		その他	1762*	セント・エドモンド礼拝堂	Robert Chambers
100	Howe, George Augustus, 3rd Viscount Howe		軍人：陸軍准将	1759	身廊	Peter Scheemakers
101	Ireland, John		聖職者	1842*	南翼廊	John Ternouth
102	Johnstone, George		政治家	1813*	聖歌隊席北側廊	John Flaxman

番号	氏名	職業 ⁺¹	年 ⁺²	設置場所	制作者
103	Jonson, Ben	文人・芸術家	1723	南翼廊	John Michael Rysbrack
104	Kane, Richard	軍人：陸軍准将	1736*	北翼廊	John Michael Rysbrack
105	Kemble, John Philip	文人・芸術家	1823*	セント・アンドルー礼拝堂	John Flaxman
106	Kempenfelt, Richard	軍人：海軍大将	1782*	セント・アンドルー礼拝堂	John Bacon II
107	Kendall, James	政治家	1708*	聖歌隊席南側廊	
108	Kendall, Mary	その他	1710*	洗礼者ヨハネ礼拝堂	
109	Killigrew, Robert	軍人：陸軍准将	1707*	聖歌隊席北側廊	Francis Bird
110	Kirke, Percy	軍人：陸軍中将	1743	北翼廊	Peter Scheemakers
111	Kneller, Sir Godfrey	文人・芸術家	1730	聖歌隊席南側廊	John Michael Rysbrack
112	Knipe, Thomas	聖職者	1711*	聖歌隊席南側廊	
113	Lake, George Augustus Frederick	軍人：陸軍中佐	1808*	身廊	John Smith
114	Lawrence, Stringer	軍人：陸軍少将	1775*	聖歌隊席北側廊	William Tyler
115	Levinz, William	政治家	1765*	聖歌隊席北側廊	
116	Ligonier, John, Earl Ligonier	軍人：陸軍元帥	1773	北回廊	John Francis Moore
117	Livingstone, Thomas, Viscount Teviot	軍人：陸軍中将	1711*	身廊	
118	Loten, John Gideon	その他	1793	聖歌隊席北側廊	Thomas Banks
119	Macaulay, Zachary	政治家	1842	身廊	Henry Weekes
120	Mackenzie, James Stuart	政治家	1800*	南翼廊	Joseph Wilton
121	Mackintosh, Sir James	文人・芸術家	1832*	身廊	William Tweed II
122	Macleod, Charles	軍人：陸軍中佐	1812*	洗礼者ヨハネ礼拝堂	John Bacon II
123	Malcolm, Sir John	軍人：陸軍少将	1833*	北翼廊	Sir Francis Chantrey
124	Manningham, Coothe	軍人：陸軍少将	1813	北翼廊	John Bacon II
125	Mason, William	文人・芸術家	1799	南翼廊	John Bacon I
126	Mead, Richard	科学者・技術者	1755	聖歌隊席北側廊	Peter Scheemakers
127	Methuen, John, and Paul Methuen	政治家	1706*	聖歌隊席南側廊	John Michael Rysbrack
128	Milton, John	文人・芸術家	1737	南翼廊	John Michael Rysbrack
129	Monck, George, 1st Duke of Albemarle	軍人：陸軍大将・海軍大将	1742	ヘンリ7世礼拝堂	Peter Scheemakers
130	Monck, Nicholas	聖職者	1723	セント・エドモンド礼拝堂	William Woodman
131	Montagu, Charles, 1st Earl of Halifax	政治家	1715*	ヘンリ7世礼拝堂	
132	Montagu, James	軍人：勅任艦長	1804	身廊	John Flaxman
133	Murray, William, Earl of Mansfield	政治家	1801	北翼廊	John Flaxman
134	Newton, Sir Isaac	科学者・技術者	1731	身廊	William Kent and John Michael Rysbrack
135	Nightingale, Joseph Gascoigne, and Lady Elizabeth Nightingale	政治家	1761	セント・マイケル礼拝堂	Louis Francois Roubiliac
136	Oughton, Sir James	軍人：陸軍中将	1780*	北回廊	Richard Hayward

137	Paoli, Pasquale		その他	1807	聖歌隊席南側廊	John Flaxman
138	Pearce, Zachary		聖職者	1777	聖歌隊席南側廊	William Tyler
139	Perceval, Spencer		政治家	1822	聖歌隊席北側廊	Sir Richard Westmacott
140	Percy, Elizabeth, Duchess of Northumberland		その他	1776*	セント・ニコラス礼拝堂	Robert Adam and Nicholas Read
141	Percy, Isabella, Countess of Beverley		その他	1812*	セント・ニコラス礼拝堂	
142	Philips, John		文人・芸術家	1708*	南翼廊	John Bacon I
143	Pitt, William, the elder, 1st Earl of Chatham		政治家	1778*	北翼廊	Sir Richard Westmacott
144	Pitt, William, the younger		政治家	1806*	身廊	Sir Richard Westmacott
145	Plenderleath, John		科学者・技術者	1811*	聖歌隊席北側廊	John Bacon II
146	Pocock, Sir George		軍人：海軍大将	1796	福音記者ヨハネ礼拝堂	John Bacon I
147	Prideaux, Sir Edmund		その他	1729*	聖歌隊席北側廊	Sir Henry Cheere
148	Priestman, Henry		軍人：勅任艦長	1712*	身廊	Francis Bird
149	Pringle, Sir John		科学者・技術者	1782*	南翼廊	Joseph Nollekens
150	Prior, Matthew		文人・芸術家	1726	南翼廊	James Gibbs and John Michael Rysbrack
151	Pritchard, Hannah		文人・芸術家	1768*	南翼廊	Richard Hayward
152	Pulteney, William, Earl of Bath		政治家	1767	北側廊	Joseph Wilton
153	Raffles, Sir Thomas Stamford		政治家	1832	聖歌隊席北側廊	Sir Francis Chantrey
154	Rennell, James		科学者・技術者	1830*	身廊	Jacob Hagbolt
155	Roberts, John		政治家	1776	南翼廊	Richard Hayward
156	Robinson, Elizabeth, Dowager Baroness of Lechmere, and Sir Thomas Robinson		その他	1760	南翼廊	Filippo della Valle and Edme Bouchardon
157	Rowe, Nicholas		文人・芸術家	1742	南翼廊	John Michael Rysbrack
158	Sausmarez, Philip de		軍人：勅任艦長	1747*	聖歌隊席北側廊	Sir Henry Cheere
159	Savile, Elizabeth, Countess of Mexborough		その他	1821*	洗礼者ヨハネ礼拝堂	Robert Blore
160	Shakespeare, William		文人・芸術家	1741	南翼廊	William Kent and Peter Scheemakers
161	Sharp, Granville		政治家	1816	南翼廊	Sir Francis Chantrey
162	Sheffield, John, 1st duke of Buckingham and Normanby		政治家	1722	ヘンリ7世礼拝堂	Laurent Delvaux and Peter Scheemakers
163	Shovell, Sir Cloudisley		軍人：海軍大将	1707*	聖歌隊席南側廊	Grinling Gibbons
164	Siddons, Sarah		文人・芸術家	1845	セント・アンドルー礼拝堂	Thomas Campbell
165	Smith, John		その他	1718*	聖歌隊席南側廊	James Gibbs and John Michael Rysbrack
166	South, Robert		聖職者	1716*	南翼廊	Francis Bird
167	Southey, Robert		文人・芸術家	1843*	南翼廊	Henry Weekes
168	Sprat, Thomas		聖職者	1713*	セント・ニコラス礼拝堂	Francis Bird
169	St. Denis, Charles de, Lord St Evremond		文人・芸術家	1703*	南翼廊	Francis Bird
170	Stanhope, Charles Banks		軍人：陸軍少佐	1814	身廊	Sir Richard Westmacott

番号	氏名	職業 ^{†1}	年 ^{†2}	設置場所	制作者
171	Stanhope, James, 1st Earl Stanhope	軍人：陸軍中将	1733	身廊	William Kent and John Michael Rysbrack
172	Staunton, Sir George Leonard	科学者・技術者	1824	聖歌隊席北側廊	Sir Francis Chantrey
173	Stepney, George	政治家	1707*	聖歌隊席南側廊	Grinling Gibbons
174	Stewart, John	軍人：勅任艦長	1811*	聖歌隊席北側廊	
175	Stewart, Robert, Lord Castlereagh, 2nd Marquis of Londonderry	政治家	1849	北翼廊	John Evan Thomas
176	Storr, John	軍人：海軍少将	1783*	福音記者ヨハネ礼拝堂	William Tyler
177	Strode, William	軍人：陸軍中将	1776*	聖歌隊席南側廊	Richard Hayward
178	Stuart, Sir Charles	軍人：陸軍大将	1801*	セント・アンドルー礼拝堂	Joseph Nollekens
179	Sutton, Evelyn Levett	聖職者	1835*	聖歌隊席北側廊	Sir Francis Chantrey
180	Taylor, Robert	文人：芸術家	1788*	南翼廊	
181	Telford, Thomas	科学者・技術者	1839	セント・アンドルー礼拝堂	Edward Hodges Baily
182	Thomas, John	聖職者	1793*	聖歌隊席南側廊	John Bacon I
183	Thomson, James	文人：芸術家	1762	南翼廊	Robert Adam and Michael Spang
184	Tierney, George	政治家	1832	身廊	Richard Westmacott II
185	Totty, Thomas	軍人：海軍少将	1802*	セント・アンドルー礼拝堂	John Bacon II
186	Townshend, Roger	軍人：陸軍中佐	1761	聖歌隊席南側廊	Robert Adam and Thomas and Benjamin Carter
187	Trigge, Sir Thomas	軍人：陸軍大将	1815	聖歌隊席南側廊	John Bacon II
188	Twysden, John	軍人：海尉	1707*	身廊	
189	Twysden, Josiah	軍人：陸軍大尉	1708*	身廊	
190	Tyrrell, Richard	軍人：海軍少将	1770	聖歌隊席南側廊	Nicholas Read
191	Vernon, Edward	軍人：海軍大将	1763	北翼廊	John Michael Rysbrack
192	Villetes, William Anne	軍人：陸軍中将	1808*	セント・アンドルー礼拝堂	Sir Richard Westmacott
193	Vincent, Hannah	その他	1807*	南翼廊	
194	Vincent, William	聖職者	1815*	南翼廊	
195	Wade, George	軍人：陸軍元帥	1752	身廊	Louis Francois Roubiliac
196	Wager, Sir Charles	軍人：海軍大将	1747	北翼廊	Peter Scheemakers
197	Walpole, Catherine	その他	1737*	ヘンリ7世礼拝堂	John Michael Rysbrack
198	Warren, Elizabeth	その他	1825	北翼廊	Sir Richard Westmacott
199	Warren, John	聖職者	1800*	北翼廊	Sir Richard Westmacott
200	Warren, Sir Peter	軍人：海軍中将	1757	北翼廊	Louis Francois Roubiliac
201	Watson, Charles	軍人：海軍中将	1763	北翼廊	James Stuart and Peter Scheemakers
202	Watt, James	科学者・技術者	1825	セント・ポール礼拝堂	Sir Francis Chantrey
203	Watts, Isaac	文人：芸術家	1780	聖歌隊席南側廊	Thomas Banks
204	West, Temple	軍人：海軍中将	1761	聖歌隊席北側廊	Joseph Wilton

205	Wetenhall, Edward	科学者・技術者	1733*	南翼廊	William Woodman
206	Whytell, Ann	その他	1791	聖歌隊席北側廊	John Bacon I
207	Wilberforce, William	政治家	1840	聖歌隊席北側廊	Samuel Joseph
208	Wilcocks, Joseph	聖職者	1756*	聖歌隊席南側廊	Sir Henry Cheere
209	Williams, Charles	文人・芸術家	1720*	聖歌隊席北側廊	Thomas Banks
210	Wintringham, Sir Clifton	科学者・技術者	1794*	北翼廊	Joseph Wilton
211	Wolfe, James	軍人：陸軍少将	1772	北回廊	Peter Scheemakers
212	Woodward, John	科学者・技術者	1732	聖歌隊席北側廊	Richard Hayward
213	Wrags, William	その他	1779	聖歌隊席南側廊	
214	Wyatt, James	文人・芸術家	1813*	南翼廊	
215	Young, Thomas	科学者・技術者	1834	北翼廊	Sir Francis Chantrey

※網掛けは、軍人のモニュメントをあらわす。

†1：軍人については位階も記している。

†2：アスタリスクがついている場合は没年を、ついでない場合はモニュメントが建立もしくは除幕された年をしめす。
 典拠：Royal Commission on Historical Monuments (England), *An inventory of the historical monuments in London I: Westminster Abbey* (London, 1924), pp. 101-10; Westminster Abbey official website <URL=https://www.westminster-abbey.org>; *Oxford Dictionary of National Biography* <URL=https://www.oxforddnb.com> より作成。